

# ほんとうに いやな、ひどい メッセージ

このお話は、アメリカ合衆国での出来事です。

「レイチェル、お願い！」ザックはお姉さんに必死でたのみました。「もう一回だけ一緒にゲームをしようよ！」

「できないの、ザック。宿題があるから」とレイチェルは言いました。「明日の夜ならできると思うわ。」レイチェルは部屋から出て行きました。

「もう絶対一緒に遊ばないよ！」とザックは言いました。少し大きな声になってしまいました。

「ザック、レイチェルに宿題をさせてあげなさい。」お父さんはそう言って、ゲームで使ういろいろなこまをくべりました。ザックは椅子にがっかりとこしを下ろしました。レイチェルはいつも宿題をしているように思えます。そして、来年は大学生になるので！もうレイチェルにはほとんど会えなくなるかもしれません。

「ザック、あなたの番よ」とお母さんが言いました。

ザックはゲームのこまを動かして、次の番が来るのを待ちました。ふと、お母さんの携帯電話が目に入りました。ザックはあることを思いついて、お母さんの携帯電話を手に取り、すばやくメッセージを入力しました。

やあ、レイチェル。君はほんとうにいやな、ひどい、意地悪な人だね。ザックより。

やったぞ。ザックはにやっと笑って、送信ボタンをおすと、椅子にすわり直しました。さあ、勝つためにゲームに集中です。

ゲームが何巡かすると、お母さんの携帯電話が鳴りました。お母さんは画面を読みました。

「えっと、ザック？」お母さんが言いました。「これ、あなたへのメッセージみたいよ。」

ザックはにんまりしました。レイチェルの返事はどんなものだろうと思いました。ザックは携帯電話を受け取って、メッセージを読みました。

こんにちは、ザック。あなたはすばらしい神の息子です！愛をこめて、スチュワート姉妹より。

ザックはおなかがひっくり返るような感じになりました。「何てことだ！」と息をのみました。「しまった、しまった、しまった！」

「どうした？」お父さんが聞きました。

ザックがメッセージを送った相手は、お姉さんのレイチェルではありませんでした。スチュワート姉妹だったのです！レイチェ

「しまった！」  
とザックは  
言いました。



ル・スチュワート姉妹。お母さんのミニスタリングの同僚に、ほんとうにいやな、ひどい、意地悪な人だと言ってしまったのです！ザックは両手で顔をおおいました。テーブルの下にもぐって100年間そこにいたいと思いました。いえ、たぶん1,000年間。

「どうしたの、ザック？」とお母さんがたずねました。

「ぼく、レイチェルとまちがえて、スチュワート姉妹に失礼なメッセージを送っちゃったんだ。わざとじゃないんだよ！」ザックはすぐに、もう一度スチュワート姉妹にメッセージを送りました。

ごめんなさい、スチュワート姉妹。お姉ちゃんに送ったつもりだったんです。

ザックはくちびるをかみしめて、返事を待ちました。とてもおこるでしょうか。スチュワート姉妹はいつもみんなにとっても親切でした。でも、もしスチュワート姉妹の気持ちをきずつけていたら、どうすればよいでしょうか。

お母さんの携帯電話が鳴りました。

ザック、ゆるします！言葉づかいは少しあなたらしくなかったけれど、あなたから連絡をもらえてうれしかったです。あなたをずっと前から知ってるので、あなたはいつかすばらしいことを行う善良な少年だと、わたしは知っています。ひよっとすると今晚にでも、何かすばらしいことを行うかもしれませんね！

ザックはふーっと息をはきました。ずっと気分が楽になりました。

「大丈夫？」とお母さんがたずねました。

「たぶんね」とザックは答えました。

「送った相手がほかの人ではなく、スチュワート姉妹だったのは幸運ね」とお母さんは言いました。「いつもすぐに相手をゆるす人だから。」

ザックはうなずきました。スチュワート姉妹は良いものはなでした。そして、たとえお姉ちゃんにでも、あんなメッセージを送るべきではなかったと思いました。自分の言葉を、人をきずつけるためでなく、親切なことを言うために使うことが大切だと気づいたのです。

ザックは急に立ち上がりました。「すぐもどって来るよ。レイチェルに話しに行かなければならないことがあるんだ！」●